

「知る」から「考える」
～さまざまな視点から国際協力を考えよう～

下辻 孝美

川崎市立宮前平中学校

◆担当教科：英語

◆実践教科：総合、道徳、英語

◆時間数：9 時間

◆対象学年：中学3年生

◆対象人数：37名（内容により402名）

◆指導案

○実践の目的

- ・タンザニアの生活や文化を知ることによってタンザニアへの理解を深め、他国への興味・関心を高める。
- ・他国・他者に対する偏見、固定観念を払い、さまざまな角度で物事をみる大切さに気付かせる。
- ・開発途上国の現状を知り、自分たちがどのようなかたちで国際協力ができるか考えさせる。
- ・タンザニアを通して、自国や自分自身の生活を振り返り、自己の生き方を考えさせる。

○授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	タンザニアと言えば？ ねらい：タンザニアのイメージを膨らませることで、アフリカのタンザニアに興味をもつ。	(1) タンザニアに対するイメージをできるだけ多く書き出す。 (2) 一人ずつイメージを発表して、お互いのイメージを共有する。	・ワークシート ・地図
2	英語 日本の文化紹介(手紙、折り紙) ねらい：タンザニアの人々に伝えるように日本の文化紹介を英語で書く。	(1) 日本の文化紹介を英語で書く。手紙も書く。 (2) プレゼントの折り紙を折る。	・教科書 ・画用紙、折り紙
3	タンザニアってどんな国？ ねらい：自分もっている固定観念に気付かせる。日頃の生活の思い込み、偏見はないか考える。	(1) 写真を見て、気付いたことを書き出す。 (2) 写真や動画を通して、タンザニアがどのような国なのかを考える。	・ワークシート ・写真 ・動画
4 5	日本の観光ツアーをつくらう！ ねらい：日本のツアーづくりを通して、日本の良さや独自性に気付くことで、タンザニアとの共通点や違いを発見する。	(1) タンザニア人に向けた日本の観光ツアーをグループでつくる。 (2) 各グループ発表をする。 (3) 自分が参加したいツアーを考える。	・ワークシート ・模造紙

6	<p>写真を撮る意味 道徳 きらめき「葛藤」</p> <p>ねらい：一枚の写真から写真を撮る人、撮られる人、見る人の気持ちになり、写真の意味を考える。</p>	<p>(1) タンザニアのある場所で写真を撮ることを拒否された話をし、その理由を考えさせる。</p> <p>(2) 道徳資料きらめき「葛藤」を読んで、さまざまな立場の人になって、写真を撮る意味を考え、発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・写真 ・ワークシート ・道徳資料 きらめき
7 8	<p>わたしたちの村を発展させよう！</p> <p>ねらい：村の一員として、村の発展を考えることで、開発途上国の立場になって開発、国際協力について考える。</p>	<p>(1) タンザニアのある村の話をする。</p> <p>(2) 村を発展させるために、水道、電気、道路の中から優先して必要なものは何かを班ごとに考える。</p> <p>(3) 理由を含め、班ごとに発表する。</p> <p>(4) 実際にある村の事例、映像を紹介する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・写真 ・動画（道路の様子）
9	<p>ガーナのカカオ農園で働く子どもたち</p> <p>ねらい：今までの授業を通して、感じたこと、学んだことをもとに援助、国際協力をする必要があるかを考え、また、その方法を考える。</p>	<p>(1) 映像を見せ、ガーナのカカオ農園で働く子どもたちにチョコレートをあげるかあげないかを考え、発表する。</p> <p>(2) ガーナに住む子どもたちのために自分自身にできることをダイヤモンドランキングで考える。</p> <p>(3) 今までの授業を通して、どのような役割を自分が担い、他国の人々とどのように関わっていきたいかをまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・DVD（カカオ農園の映像）

◆ 授業の詳細

○1時間目：タンザニアと言えば？

担任がタンザニアに行くことになったことを伝えた。タンザニアがアフリカ大陸にあることを確認し、タンザニアと言えば、イメージすることをできるだけたくさん書き出した。その後、一人ずつ発表し、黒板に全て書きだした。

イメージ例) 人が多い・暑い・砂漠・辛い食べ物・自然がいっぱい・治安が悪い・水が茶色・バナナがたくさんとれそう・虫が多い・日が強い・昔からの物が多い・民族・狩り・布の服…など

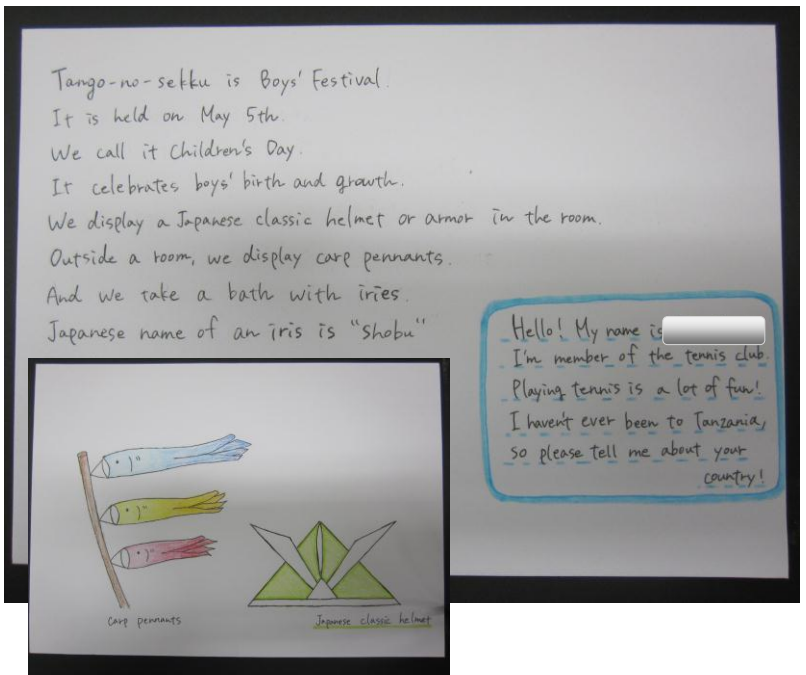
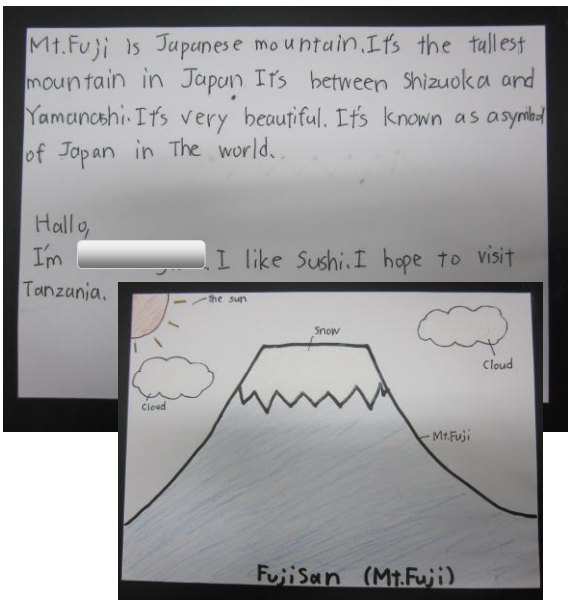
事前に生徒のタンザニアに対するイメージを聞くことで、生徒のイメージと実際のタンザニアで同じ部分と、異なる部分を生徒の目線からみつけることができた。また、授業づくりの中では、生徒が考えるタンザニア像を知っていることで、写真選びや動画づくりの際に参考にすることができた。

「タンザニア」だけではなかなかイメージが湧きにくかったので、「アフリカ」ということは伝えて考えさせた。一人ひとつずつ発表をしていったが、生徒は楽しそうに参加していた。

○2時間目：日本の文化紹介（手紙、折り紙）

中学3年生の英語の授業で日本の文化紹介を英語で行う単元が教科書に出てくる。実際に、タンザニアの人に日本の文化紹介をすることを伝え、一人ひとつ、紹介メッセージを作成した。メッセージを一言加えて、完成させた。授業の中で勉強している英語を通して、海外の人とつながることができる、ということを実感することで、タンザニアを身近に捉えることができた。また、英語を教室内のものに留めず、交流を図る手段として使用することで、英語を学ぶ意義も見出させたいと考えた。タンザニアの人に届ける、ということもあり、生徒は丁寧に、真剣に作業していた。日本に戻ってから、実際にタンザニアの小学生がメッセージを手を持っている写真を見せた。

生徒の日本文化紹介



受け取った生徒たち

○3時間目：タンザニアってどんな国？

帰国後、最初の授業である。タンザニアに対して抱いていたイメージを崩す授業を目指した。

- ①4人1グループをつくり、各班に一枚、異なった写真を配布する。(9グループあるので、9枚の異なる写真がある。)写真の周りの余白に気付いたことや疑問に思ったことなど些細なことでも良いので「つぶやき」を班員に話しながら書きこんでいく。このとき、声に出しながら書くことで、一人ひとりの意見や考えを共有することが大切である。

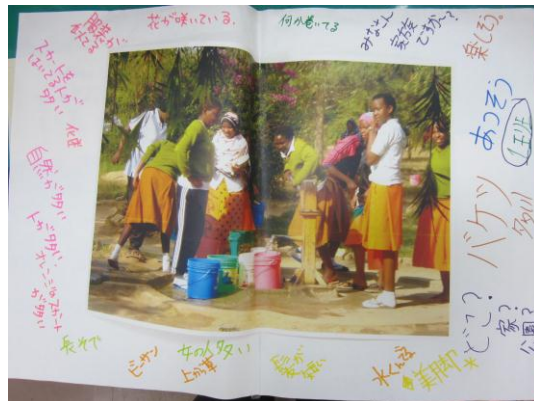
使用した写真①(携帯電話をしようするマサイ族)



写真②(道路脇で話をしている女性と子どもたち)



余白に生徒がつぶやきを記入



- ②教室のテレビに各班の写真を写しながら、写真の中で気づいたことやタンザニアがどのような国なのか、班で話し合ったことを代表者がクラスの前で発表する。クラス全員が9枚の写真を見て、さまざまな角度でタンザニアがどのような国なのかを考えた。その後、タンザニアで撮影した映像を見せ、さらにタンザニアへの理解を深めた。以前、聞いていたタンザニアへのイメージをもとに、生徒がイメージするタンザニア(動物、土の道路など)とイメージしないタンザニア(高層ビル、車など)の両方を映像に入れるようにした。



生徒の感想

- ・アフリカにあったので、初めは貧しい国かと思っていたけれど、意外と建物があり、発展していたことがわかった。また、服装は日本と変わらない人もいたけれど、民族衣装を着た人も多くいたので、発展していても昔からの伝統は続いているなと思った。スマートフォンのようなものを持っていたのはおどろいた。
- ・タンザニアはもっと貧しいところで、森などの自然ばかりがある国だと思っていたのですが、実際は森などの自然もたくさんあるけれど、それだけじゃなくて都市もあるところにびっくりしました。また、都市に住んでいる人と森のほうに住んでいる人との格差が大きいと思いました。格差というと中国も格差が大きいので場所とか理由とか違うけれどどこにでも格差の問題はあるのだということがわかりました。
- ・私はタンザニアと言ったらタンザニア全部が、道路が舗装されていなくて、自然が豊かかかと思っていたけど、都会はそうでもなく、普通の町なみで高いビルは建っていて、自然も少なくて驚きました。だけど、車で何時間か走って、地方に行くと、イメージしていたのと同じ、野生の動物がいて、道路が舗装されていなくて、自然が都会より多くて、というのがあって、何かホッとしました。タンザニアにも貧富の差があるんだとわかりました。

最初にもっていたイメージを崩すことで、自分も持っている固定観念に気付き、偏見的な視点でタンザニアを見ていなかったかを振り返ることができた。教員が言葉で伝えなくても写真や動画を通して、生徒は多くのことに気づき、また発表を通して、お互いに学び合うことができた。

○4・5時間目：日本の観光ツアーをつくろう！

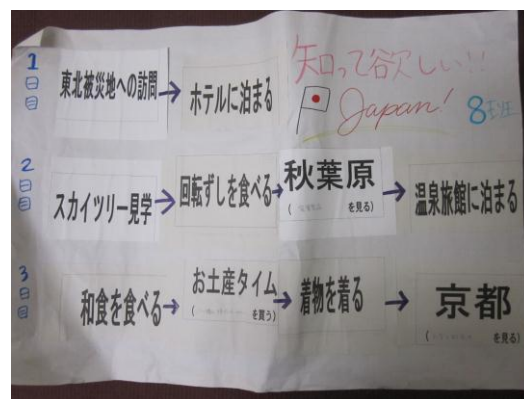
タンザニアについて3時間目に知ることができたので、タンザニアの人々に自分たちが住んでいる国、日本の観光ツアーをつくるという設定で、日本の観光ツアーをグループで作った。

- ①タンザニアで友達になったローザさんを紹介する。ローザさんがみんなに向けて話してくれたメッセージを映像で見せる。ローザさんの大学では、日本語を専攻している学生は3人しかいないことを伝え、タンザニアの人々にもっと日本を知ってもらうために、日本の観光ツアーをつくることを伝える。
- ②タンザニアを思い浮かべながら、日本の良さや独自性を伝えられるような2泊3日のツアーを4人グループで考えた。ツアーの題名を考え、事前に用意したカードを模造紙に並べて、ツアーを作成した。与えられたカード以外にも自分たちで考えて新たに書き加え、各班でオリジナルのツアーを考えた。「タンザニアには～はなさそう」「日本の～なところを伝えたい」などという声が生徒から聞こえた。
- ③2泊3日のツアーをグループごとに発表し、自分なら「このツアーに参加したい！」と思うツアーを各自で選んだ。

ローザさん



観光ツアー作成の様子



生徒の感想

- ・やっぱり日本の良いところも苦しいところも全部知ってほしいし、逆に私が何かのツアーに参加して他の国に行く場合も、良いところ、苦しい？ところを知りたいなと思いました。
- ・全部の班に共通していたところが、日本の寺に行っていたことなので、やっぱり自分の国の良い部分は絶対に見てほしいと感じられた。自分が他の国を訪れるときは、その国だけの特別なところを見たいと思った。
- ・自分の班は日本の楽しいところを満喫するだけだったけど、東日本の被災地に行って、被災者の苦しみもわかってもらおうとしている班があったのは良いと思った。

タンザニアを通して、自分の住んでいる国について振り返ることができた。また、タンザニアの人々に日本をどのような視点で見てほしいかを考えることで、逆に、自分たちがタンザニアをはじめ、他の国に行ったときにどのような視点でその国を見たらよいかに気づくことができた。良いところやその国が大切にしていることに気づける視点を養ってほしい、と思いこの授業を展開した。

○6時間目：写真を撮る意味

道徳資料 きらめき「葛藤」を通して、普段何気なく撮っている写真について考える。さまざまな立場の人になって、写真を撮る意味を考える。

- ①タンザニアのある場所で写真を撮ることを拒否された話をし、その理由を考えさせる。タンザニアの様子を伝えたい、という思いで写真を撮っている観光客に対し、「私たちにメリットはあるのか」と問うタンザニア人の話をした。
- ②道徳資料きらめき「葛藤」を読んで、写真を撮る人、撮られる人、見る人の気持ちになり、写真が与える影響や意味を考える。

生徒の感想

- ・あの状況を伝えるのはとても大切なことだと思うし、国の人々も助かるかもしれないから（あの写真を見て、支援してくれる人がいるかもしれない）少なくとも、この先のことにつながられる写真だったと思う。でも、命はなににもかえられないほど大切なものだから、写真を撮ったことには責任を持って、自殺ではなく、しっかり生きて考えるべきだと思った。
- ・授業で話し合いをしているうちに、自分が今まで何も知らなかったことに情けなくなりました。また、誰かの行動の結果論を批評するのは簡単だと思います。だからこそキレイごとを言って命は大事と主張するどんな多くの人たちよりも、カーターさんが一番命の大切さを知っていて、守りたくて、行動した一枚はとても重大だと思います。

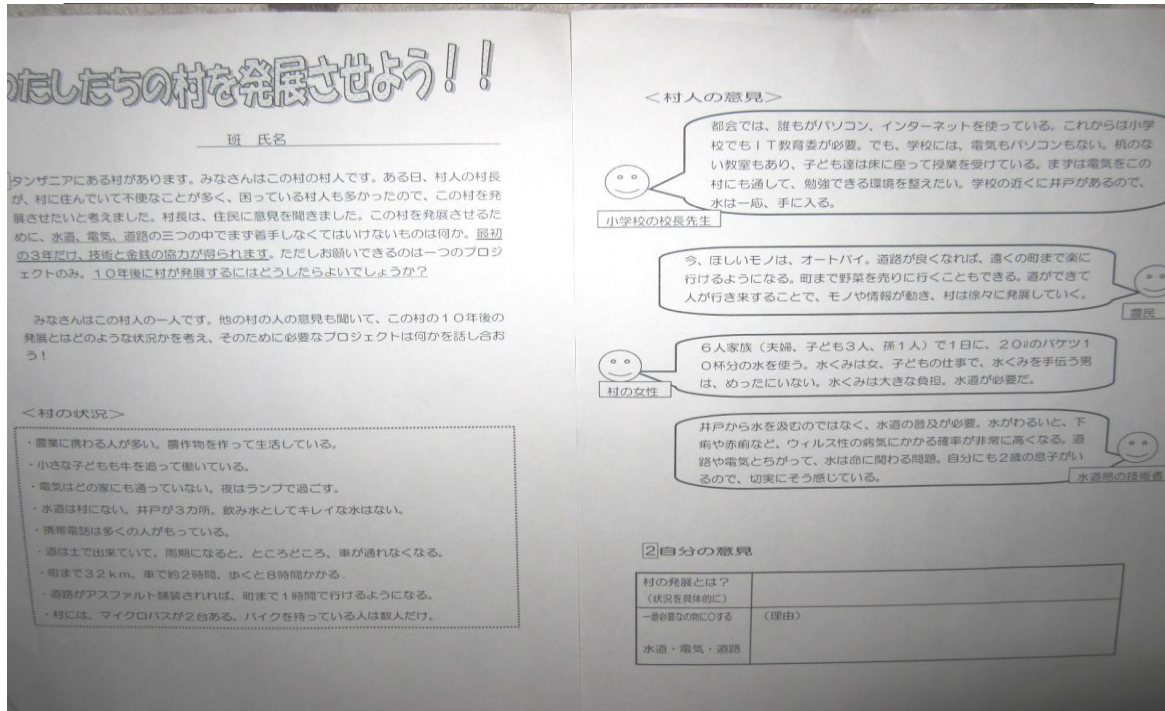
道徳資料「葛藤」は、同じアフリカにある国スーダンで写真家のケビン・カーターさんが撮った一枚の写真をめぐる話である。写真をデジタルカメラや携帯電話で簡単に撮ることができ、またインターネットで簡単に公開できる時代の中で、写真を撮られる人や見る人の気持ちについて考えた。そして、自分が写真を撮る側であった場合、どのようなことに配慮して撮るかを考えた。「様子を伝えたい」という使命感や撮る側の気持ちも大切であるが、写っている人の生活や気持ちが写真にはある、ということに気付ければ、と思う。

○7・8時間目：わたしたちの村を發展させよう！

今までの授業では、「タンザニアを知る」ことが中心だったが、次に具体的な場面を想定して、タンザニアの人々の立場にたってアクションを起こす場合について考えた。今回は、村の一員として、10年後の村の發展を目指し、今何が必要かを考えた。つまり、開発途上国の立場になって開発、国際協力について考える。

- ①タンザニアのある村の話をした。その村の状況を話し、写真を数枚見せた。その情報(ワークシートに明記)をもとに、まず「村の發展とは何か」を話し合った。
- ②その發展を成し遂げるために、水道・電気・道路から優先して必要なものは何かを話し合い、班で一つ選択する。なぜ、それが村の發展のために必要なのかをしっかりと説明できるようにしておく。
- ③グループごとに発表する。JICA の職員のみなさんが、授業を参観に来てくださった日でもあったので、JICA として、どのグループの意見に協力するかを1つ選んでいただいた。

使用したワークシート



グループで話し合ったことを発表



見せた写真 ①



生徒の感想

- ・やはり近代化や発展は大事だが、皆そのことを考えすぎて、村の人のことを考えていない。タンザニアにかぎらず、もっと貧しい国では、水がなく泥水を飲んでいる子どもや人が多くいる。現在わたしたちに水は何不自由なく飲めているがそれがあたりまえじゃない国では、皆水を求めていると思う。
- ・僕は、水道の意見だったけど、結局何が一番いいかはわからなかった。他の班には僕の意見と全然違う人がいたり逆にすごく同じ人もいて、どれが正解っていうのはいないんだなと感じた。村の発展には協力が必要だけど、村の人々の努力も必要だと思った。
- ・何が現地の人のためになるか実際に行ったことが無いので、分からないのですが、考えてみて初めて分かったことがあります。それは、自分がとても利己的な考えを持っていたことです。「足りない」「必要だ」という姿は見えていても、声を聞こうとしていない。
- ・班で「工場をつくったらどうか？」という意見が出たり、道路技術者のニコラスさんがおっしゃっていたことをふまえると発展させるということは近代化させるとのことばかりではないように感じました。急に近代化のために活動することによって村の以前からある文化や風土が失われてしまうのであれば、この活動をした意味が減ってしまうように思います。JICAの皆さんはそのようなことを考えたうえで活動しているそうなので「助ける」というのも簡単なことではないことがわかり、とてもいい勉強になりました。

水道・電気・道路の3つから選択するということもあり、生徒にとっては非常にわかりやすいようだった。個人で理由までしっかりと考えることができ、班の中で1つに意見をまとめる際もなかなかまとまらないほど、自分の意見を明確にもち、積極的に話し合いに参加する姿が見られた。「村の発展」した姿も班によって、さまざまであり、『『発展』とは何か』を時間をかけて問うこともおもしろいのではないかと感じた。ただ、それぞれの意見を求めるだけでなく、今回のように選択肢をいくつか設けることで、話し合いに参加しやすい状況をつくることのできる、と授業を行って実感した。

○9時間目： ガーナのカカオ農園で働く子どもたち

身近なチョコレートを題材に、自分たちがどのようなかたちで国際協力に携わることができるのか、または携わる必要があるのかを考えた。そして、今後自分がどのように他の国とかかわっていきたいかをまとめた。

- ①チョコレートを見せ、誰がどこで作っているのかを考えさせた。その後、映像を見せ、ガーナのカカオ農園で働く子どもたちの姿を見る。チョコレートを食べたことのない子どもたちにチョコレートをあげるかあげないかを個人で考え、発表する。
- ②あげるかあげないか、正解はないことを伝える。そして、ガーナに住む子どもたちのために自分自身にできることをダイヤモンドランキングで考える。その後、班で意見を交換し、班で1つのダイヤモンドランキングを完成させる。
- ③班ごとの発表し、どのような国際協力の方法があり、自分には何ができるのかを考える。その後、今後、自分はどのような役割を担い、他の国とかかわっていきたいか、自分の生き方をまとめた。

生徒の感想

- ・今回見た「あいのり」の中で、ガーナのお母さんが「こんな状況を作ったのはあなたたち日本人を含めた先進国の人々なのよ」と言っていたことが強く心に残っていて、私が自由に暮らせているのには裏でつらい思いをしてくれている人がいるからだと改めて感じました。ガーナの人々がカカオをつくらなければ私たちはチョコレートを食べることができないので、支えてもらっている側の先進国の人々はそれに相当することを行わなければならないと思います。それも“援助”という形や言葉を使うとどうも身分の差をつくってしまうような気がするので友達同士のような国と国との関わりあいがあればいいなと思います。そのために私は先進国に住む1人として様々な国のおかれている環境を自分の目で見たいと本当に思いました。なのでまず、外国の方と話せるように英語を、余裕があれば他の言語も話せるようになります。

◆ 成果と課題

「開発教育をやりたい！」という希望がありながらもなかなか継続して、実践することができなかったが、今回の研修を通して、継続して授業をさせていただいた。今までは単発で「文化紹介」に留まっていたが、継続して授業を行うことで「知る」から「考える」に授業内容を移行でき、最後は自分がどのように関わっていきたいか、と自分のこととして捉えることができた。特に、「わたしたちの村を発展させよう！」では村の人の立場で、「ガーナのカカオ農園で働く子どもたち」では自分の立場で、どちらも具体的にどのように行動するかを深く考えることができた。

今回、私自信、授業者として授業をしていてとても楽しかった。それは、大人が知識として理解したことを生徒同士がお互いの意見交換を通して、自ら発見していたからである。さらに、私が予想もしなかった視点からも物事を考えており、生徒たちの発想の豊かさや感性の鋭さに気付かされた。私自信、生徒たちから多くのことを学ばせていただいた。と同時に、普段、あまり他の国について深く考えるような場面が学校生活の中では多くないので、やはり今回のような学びが継続的にできれば、もっといろいろな力を養うことができるのではないか、という展望を持つことができた。

しかし、「開発教育」という教科はないので、今の中学校のカリキュラムの中でどのように取り入れていくかが今後の課題になってくると感じた。今回、学年の総合的な学習の時間や道徳の中でも、11クラスで3回授業を展開したが、やはり単発で授業を行っても考えを深めることは難しい、と実感した。目標を明確にし、どのような位置づけで取り入れていくか、今後考える必要があると思った。ただ、なかなか難しいこともあると思うので、身近なことや教科と結びつけていくことで、自分がまずできることから実践していきたい。そして、今後は、actionに移せるような授業を目指したい。そのためには、身近なものと結びつけるために私自身、もっと日本のことや地域のことについて学ばなくてはならない、と気付かされた。自分の足元を見て、身近なところから他の国につなげていきたい。まずは、私自身、できることからやっっていこうと思う。

年賀状に“JAMBO!”と書いて送ってくれた生徒がいて、とっても嬉しかった。今回の授業は彼女の心の中にはどのように残っているのだろうか。義務教育を終える中学3年生が今後それぞれの道を歩いていく中で、どこかでふとタンザニアや国際協力について考えてくれたら、何よりも嬉しい。